

# 木更津市史編さんだより

木更津の歴史・文化・自然再発見マガジン

—市制施行75周年記念—



発行者 木更津市教育委員会 教育部文化課

〒292-8501 木更津市朝日3-10-19 木更津市役所朝日庁舎

Tel:0438-23-5309 Fax:0438-25-3991 E-mail:bunka@city.kisarazu.lg.jp

第2号

## 七五歳の誕生日を迎えた木更津市

木更津市は七五年前の昭和十七（一九四二）年十一月三日、木更津町、巖根村、清川村、波岡村の一町三村が合併して誕生しました。市発足当初の人口は三万三千八十七人、平成二九年四月一日では十三万四千五百八十五人と、約四倍になりました。



木更津市の人口推移

合併前の十一（一九三六）年、木更津町に木更津海軍航空隊の開隊と木更津港修築工事が完了し、十六（一九四一）年には第二海軍航空廠が巖根村に設立され、多くの軍人・軍属や工員など新住民の増加で、深刻な住宅難が生まれ、新住民は清川村に住宅を求めようになり、清川村では木更津町と連携して施設や人口の発展を吸収する態勢を整えようとしていました。

一方、波岡村でも隣接する村に軍施設ができたことで、付近一帯が住宅地となる必然性が予測され、こうして一町三村は膨張する人口を計画的に吸収するとともに、都市計画、防空計画、水道計画などで共通の計画を立てるため、強力な自治体建設が急務となりました。

十六年五月、石川善之助木更津町長は隣村の村長と有力者に呼びかけ、十七年四月に清川村、それに次いで巖根村も合併の動きをみせ、五月に波岡村が合併に加わり、九月二日、国へ市制施行に関する上申がなされ、十一月三日を期して木更津市が誕生しました。

初代市長は、木更津町長を勤めた石川善之助氏が就任しましたが、十六年十二月八日に始まった太平洋戦争は激しさを増し、戦時下の厳しい情勢のため、木更津市の誕生を祝う大規模な行事はできませんでした。

※『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』『木更津市の誕生』（二〇一〇）を改変して掲載。（事務局）



市制施行記念品の湯のみ茶碗（郷土博物館金のすず所蔵）

木更津ゆかりの地をたずねて

—京都 伏見奉行 林忠交と坂本龍馬—

今から百五十年前の慶応三(一八六七)年十月十四日、江戸幕府十五代将軍の徳川慶喜は行政権限を天皇に奏上し、およそ七百年間続いた武士の時代が終わり、天皇を中心とした時代へと移っていきました。「大政奉還」です。

平成二九(二〇一七)年は、大政奉還百五十年を記念し、幕末維新に京都で活躍した人たちとゆかりのある都市で記念事業が催されています。

坂本龍馬もこの時代に活躍した一人で、大政奉還に大きく関与していましたが、この坂本龍馬と木更津にあった請西藩との間にも深いかわりがありました。

黒船来航以来、世情が不安定だった幕末の安政六(一八五九)年に、請西藩二代目(貝淵藩から数えると三代目)藩主であった林忠交(はやし



坂本龍馬 (高知県立坂本龍馬記念館提供)



薩摩藩邸跡の碑



現在の寺田屋



伏見奉行所跡の碑

※背景地図は「洛南めぐり」(坂本龍馬の寺田屋)を改変して掲載

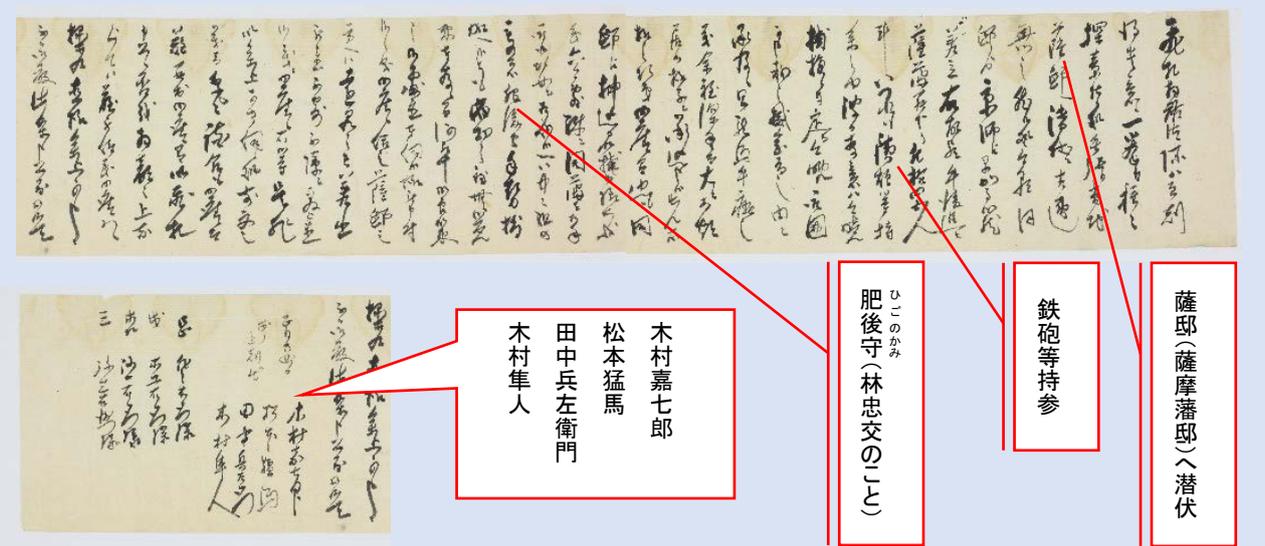
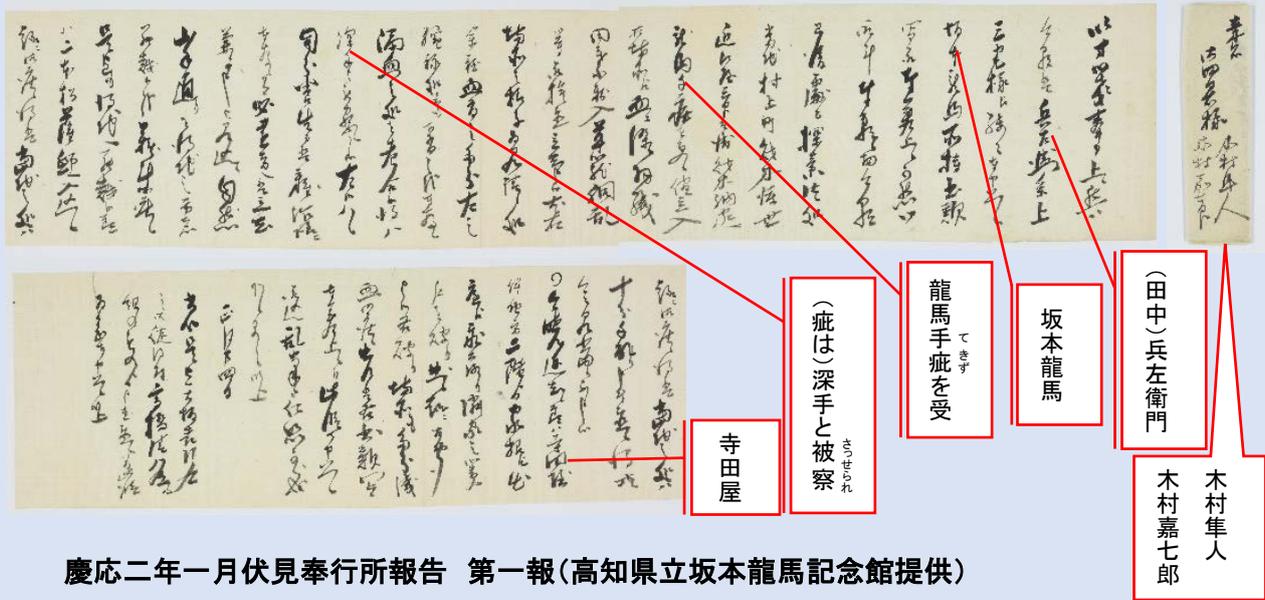
ただかたは、若干二七歳で伏見奉行として赴任し、慶応三年までの八年間、役職を務めていました。

伏見奉行所は、現在の京都府京都市伏見区西奉行町・東奉行町の辺りにあり、奉行一人、与力十人、同心五十人で組織され、伏見町や幕府直轄領の支配、京を往き来する西国大名の監視のほか、宇治川、伏見川、木津川の船舶の取締りなどを行っていました。

林忠交が在任中に伏見で起きた事件といえ、一度にわたって起きた寺田屋事件です。一度目は、文久二(一八六二)年に薩摩藩(現在の鹿児島県)の急進的な尊攘派(そんじょうは)による倒幕運動を薩摩藩が未然に防いだ事件で、九人の犠牲者が出ました。この時は薩摩藩内部で収拾したものの、不穏な動きがあるため伏見奉行所が探索していたようです。

二度目が慶応二(一八六六)年一月二三日深夜(二四日未明)、寺田屋にいた坂本龍馬を伏見奉行所が捕まえようとした事件です。事件の概要は、高知県立坂本龍馬記念館が所蔵している伏見奉行所の報告書の写しでわかります。

奉行所の資料は「坂本龍馬探索に付伏見奉行所報告書」第一報、第二報の二点で、内容は坂本龍馬が寺田屋(京都市伏見区南浜町)に宿泊していたことを察知し、伏見奉行所の捕り方(役人)が坂本龍馬を捕まえるため寺田屋(いったと



ころ、坂本龍馬は寺田屋の二階から屋根に出て庭へ飛び降り、隣の家の戸を破って逃げたこと。途中、近江屋の材木納屋で隠れていたこと。手に傷を負い、出血の量から重症であると推察されるなどと記されています。その後、伏見の薩摩藩邸(現在の京都市伏見区東境町。京都二本松の薩摩藩邸へは同月三十日に移る。)にかくまわれて難を逃れたことが判明したものの、藩邸周辺には銃を持った藩士が十四〜十五人いるため、むやみに入ることが出来ず、周辺を監視している様子などが報告されています。

報告書の作成者は、第一報は木村隼人、木村嘉七郎の二名、第二報は木村嘉七郎、松本猛馬、田中兵左衛門、木村隼人の四名で、請西藩関係資料をみると、彼らもまた藩主林忠交とともに伏見奉行所に赴任してきた請西藩士であったことがわかります。

その後、慶応三年五月二三日に林忠交は、在任中に三五歳の若さで亡くなります。幕府は後任の伏見奉行を任命せず、京都町奉行が兼務することになったので、林忠交は最後の伏見奉行となりました。林忠交の葬儀は、同年六月二七日に大坂・一心寺(大阪府大阪市天王寺区逢坂)で行われ、墓所は今も一心寺にあります。

一方、寺田屋事件で難を逃れた坂本龍馬も、同年十一月十五日、大政奉還の勅許から一ヶ月後に近江屋(京都市中京区河原町通蛸薬師

下ル)で刺客に暗殺されます。三三歳でした。坂本龍馬の墓所は、京都霊山護国神社(京都市東山区清閑寺字霊山町)にあります。

また、寺田屋事件の報告書を作成した木村隼人たち請西藩士の一部は、林忠交の跡を継いだ請西藩三代目藩主林忠崇(はやしたただか)とともに請西藩を脱藩し、旧幕府軍として戊辰戦争に従軍しました。

戊辰戦争を戦い、亡くなった藩士たちを供養するため、君津市鹿野山の台畑地先に「招魂之碑」が明治三十(一八九七)年に建てられました。石碑には木村隼人、木村嘉七郎、田中(?)兵左衛門たちの名前も刻まれています。また「招魂之碑」の題字は、旧幕府海軍副総裁や、蝦夷共和国総裁として新政府軍に抵抗した榎本武揚によります。

林忠交や坂本龍馬たちは、立場や考え方は違っていました。それぞれの立場で「日本」という国家の将来像について考え、懸命に幕末という時代を駆け抜けていったのではないのでしょうか。

### ※参考

林 勲「伏見奉行御役料増額之儀上申書」(上総請西 林肥後守殿御葬式控)『上総國請西藩主一文字大名 林侯家関係資料集』(一九八八)中村彰彦『脱藩大名の戊辰戦争 上総請西藩主・林忠崇の生涯』(二〇〇〇)玉川和彦『いしぶみを訪ねて』(二〇〇二)

渡邊忠司「大坂町奉行所における与力・同心体制の確立」『佛教大学』文学部論集』第九十号(二〇〇六)

渡邊忠司「近世京都における与力・同心体制の確立」『佛教大学』歴史学部論集』第二号(二〇一一)

高知県立坂本龍馬記念館「史料 慶応二年一月伏見奉行所報告 第一報、同 第二報」『土佐藩京都藩邸史料目録』(二〇一一)

高橋 覚「請西藩林氏と真武根陣屋」『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』(二〇一一)

實形裕介「林忠崇と請西藩」『歴史読本二〇一三年三月号 幕末戊辰戦争全史』(二〇一三)

辻 真澄「京の御役所、その仕事と資料」『京都町奉行所を中心に』『京都府立総合資料館』総合資料館だより』一八二号(二〇一五)

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課「大政奉還百五十周年記念プロジェクト」(二〇一七) (事務局)



招魂之碑

## 市内に保存されていた奉安殿

— 佐野地区 神明神社奥殿 —

近現代部会 駒 早苗

皆さん、奉安殿(ほうあんでん)をご存知ですか? 奉安殿とは、大正・昭和を通して天皇や皇后の御真影(写真)と教育勅語を奉った建物のことです。学校内に建てられたため、当時の子供たちは校門を入ると必ずその前で最敬礼をしたことを覚えている方もいることでしょう。奉安殿は、戦後GHQの民主化政策でそのほとんどが取り壊しになりましたが、地域の方々によってひそかに保存されることもありました。平成二八年十二月に千葉県長生郡一宮町で発見されたのは、記憶に新しいことです。

佐野地区では多少知られていた存在でしたが、市として公にするのは初めてになります。地区にある神明神社の奥殿として、氏子の方々に守られながらひっそりと保存されていた「御真影奉藏所」(＝奉安殿)の調査途中報告です。

近現代部会に第一報がもたらされたのは、以前この地域に住んでいた方からでした。早速現地に行き神社のガラス越しに見えたのが、大きく立派な神明造(代表的なのは伊勢神宮)の建物でした。神社の敷地内には表に「御真影奉藏所」、裏に「皇紀二千六百年四月三日 木更津町 宗政東作 宗政四郎 寄付」と書かれた石碑が建っていました。「皇紀二千六百年」とは、



佐野地区神明神社奥殿(旧奉安殿)

神武天皇即位から数えた年数で、昭和十五(一九四〇)年にあたります。

現地の聞き取り調査を行うと共に富岡公民館に保管されている(旧)富岡村役場文書の調査を開始し、その中から奉安殿が富岡小学校から佐野神明神社に移された経過を示す文書が出てきました。それによると、昭和十三年九月に暴風雨で奉安殿に被害が出て土盛作業の必要があったこと、その年の十一月に(旧)木更津町の宗政東作・四郎両氏から新築寄付を受けたこと、昭和二十一年八月に佐野神明神社の奥殿として移築申請が出されたことが記されています。また、宗政両氏は富岡村佐野の出身で、木更津町で病院を開業していたこともわか

りました。

佐野区長のご協力のもと奥殿を計測したところ、周囲に三・七メートル×三・六メートル程の縁を巡らすかなり立派な建物でした。奉安殿の内部は、菊の紋章が付いた厨子が納められています。

今後は、昭和十四年以前に建てられていた奉安殿およびその後の詳しい経過について、富岡小学校の調査が待たれます。

このように近現代部会は、市内に残されている資料の掘り起こしや目録作成、聞き取り調査や建物調査など多岐にわたって活動しています。今年度は、このほかにも明治初期に育児政策の一環として行われた「育児社」の木札の発見がありました。いずれの場合も皆さまからの情報提供や、公民館などで地域の歴史を調べて下さっている方々のご協力あつて成り立っている事業です。今年も多くの方に調査協力いただきました。ありがとうございます。まだ戦時中の話も含めお聞きしたいことはいっぱいです。どうぞよろしくお願います。

### 木更津市史編集委員会について

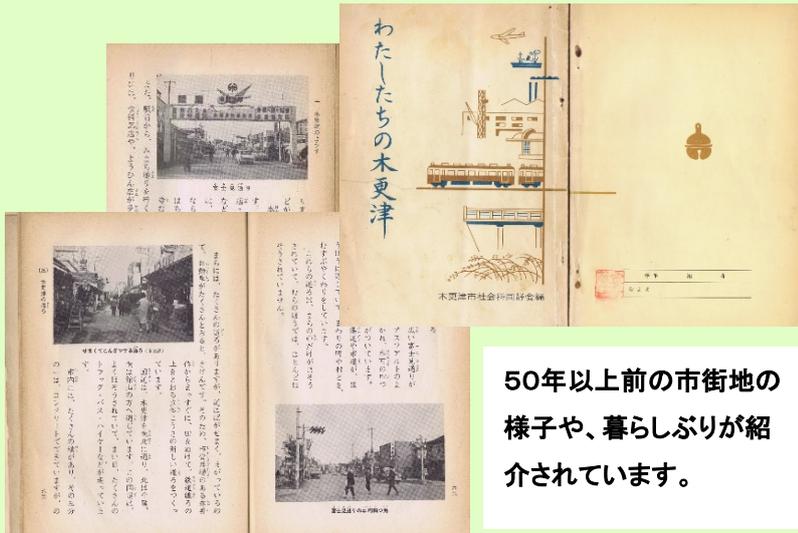
平成二九年七月一日から、新たなメンバーを含めて組織しました。今後も新たな『木更津市史』を編さんするため、編集計画の審議や調査を進めてまいります。

### 新たな『木更津市史』の編さんに期待する」と 金子 馨 前市史編集委員会委員長

平成二二(二〇〇九)年七月二七日から木更津市史編集委員会委員として、四期八年の間つとめました。以来、市制施行七〇周年記念『図説 木更津のあゆみ』の編集発行、「木更津市史編集基本構想及び基本方針」の協議、策定を行ってきました。

私が市史編集委員会委員に委嘱されたのは、小学校の社会科副読本『わたしたちの木更津』の発行に長くかかわってきたことによると思います。この本は、「自分たちの生活は、地域にある公共施設の働きや地域の人々の協力によって支えられていることを理解できるようにし、地域社会の成員としての自覚を育てる」という文部省(当時)の教育方針に基づいて作成されたものです。従って、全国各地の市町村では、それぞれにその地域を学ぶテキストとして作られています。

木更津市では、小・中学校の社会科同好会の教師たちが集まって、副読本作りに取組みました。そうして作られた初版本が、昭和三八(一九六三)年四月一日発行の『わたしたちの木更津』です。途中、千葉市内の学校に赴任していた期間を除き、平成二六年四月一日発行の改訂十八版まで、執筆、編集委員長、監修という立場でかかわってきました。



『わたしたちの木更津』や、『図説 木更津のあゆみ』の編集にあたっては、それぞれ小・中学生が理解できるよう平易な文章表現にとり、固有名詞や専門用語にはルビをふるなど、読みやすくわかりやすい内容を心がけました。これから編さんする新たな『木更津市史』の本編についても、専門的な内容を保ちつつ、読みやすく、わかりやすい表現にして市民の皆さんをはじめ、その他多くの人たちが手にとって読んで理解できるように市史の編さんを望みます。

『わたしたちの木更津』創刊号(昭和38年4月1日発行)

**市史編集部会の活動報告**

平成二九年度から、考古(六名)、古代(三名)、中世(五名)の三部会を新たに設置し、七つの専門部会により市史編さんに係る調査を進めております。

調査は、市民の皆さまからお寄せいただいた情報などをもとに行うので、ぜひ、情報提供をお願いいたします。

**考古部会**

遺跡・遺構・遺物台帳、遺跡地図等の仕様を協議し、各委員からの原案をもとに台帳等の作成を開始していきます。また遺跡発掘調査報告書の所在の確認や、内容の精査を行っております。

**古代部会**

『千葉県の歴史』を基礎に採録史料の選択作業のほか、「馬来田」「望多」「望陀」表記、望陀布の使途、親王任国制の検討などを行っております。あわせて史料に関連する研究成果の検討作業も行います。

**中世部会**

真里谷武田氏関係文献の検索・整理作業を進めるとともに、国立歴史民俗博物館などの資料所在地の確認を行っています。また、神奈川県立金沢文庫など県外施設が所蔵する資料の閲覧、撮影等の調査を進めます。

**近世部会**

郷土博物館金のすず等が保管する古文書等資料の収集・調査・資料整理を行いました。富来田地区では個人宅を近現代部会と合同で調査し、同家から収集した襖下貼り文書のがし作業と翻刻・目録作成を進めています。石造物調査は、近世墓標を中心に所在確認調査を実施したほか、市原市龍溪寺の林家墓所を測量調査しました。建造物調査は、所在調査と建物構造調査を行っています。そのほか、木更津図書館が所蔵する和本を中央大学・一橋大学の調査チームと合同調査を行っています。引き続き金田地区を重点地区として資料収集調査を行います。



図書館所蔵和書の合同調査

**近現代部会**

千葉県文書館等木更津市関連資料の調査・撮影を行いました。また市内公民館等が所蔵する旧役場文書、個人資料等の撮影・資料選定を行いました。そのほか、市内在住の方への聞き取り調査、歴史的建物の所在確認や実地調査を行っています。引き続き公民館等において資料の調査・撮影や、市内での聞き取り調査を継続実施していきます。

**民俗部会**

毎年七月に開催される八剣八幡神社の夏の祭礼に先立ち、氏子組織や、総代会の運営および青年会に関わる聞き取り調査、旧木更津地区町会の運営に関わる調査を行い、七月十四日～十六日にかけて行われた祭礼の記録調査を行いました。また追加調査として、旧木更津地区通過儀礼、人生儀礼調査を行っています。桜井地区諏訪神社例大祭獅子舞に関わる調査や、金田地区中島の梵天立ての参与観察と記録を引き続き行っています。

**自然部会**

環境は、盤洲干潟の浸透実験池で水質調査を行っています。地学は、下総層群上部(清川層・横田層・木下層・姉崎層)および関東ローム層中のテフラ鍵層の所在調査を行い、柱状図の作成、撮影を行っています。動物は、両生類・爬虫類・鳥類・魚類の種リストを作成し、七月～九月はバツタ類、甲虫類、カメムシ類、爬

虫類の出現が最多季節で、野外分布調査を重点的に行っています。植物は、千葉県立中央博物館と合同調査を実施しています。そのほか、太田山公園の植生について、『図説 木更津のあゆみ』編集以後に芽生えたと思われる照葉樹、草本の調査、春には盤洲干潟浸透実験池外場の植物、矢那川土手、田川・佐野の植物調査を行いました。引き続き市街地・干潟・蓮田の植物調査を行います。



河川での魚類調査(上)

翅(はね)を休める  
ウチワヤンマ(右)**トピックス****「チバニアン」について** 自然部会 篠崎 貞

最近、「チバニアン」という言葉が、ニュースとして新聞などで報じられています。

つい最近の二〇一七年六月七日のニュースでは、茨城大の岡田 誠教授、国立極地研の菅沼悠介准教授らを中心とする二二機関三二名からなるグループが、国際地質科学連合の専門部会に市原市田淵字白尾(たぶち あざ びやくび)にある養老川右岸の露頭をこの時代を代表する国際標準模式地に認定するよう申請し、さらに約七十年前～十二・六万年前の地質時代にチバニアン(Chibanian)の名称を提案した申請書を提出したことが報道されています。

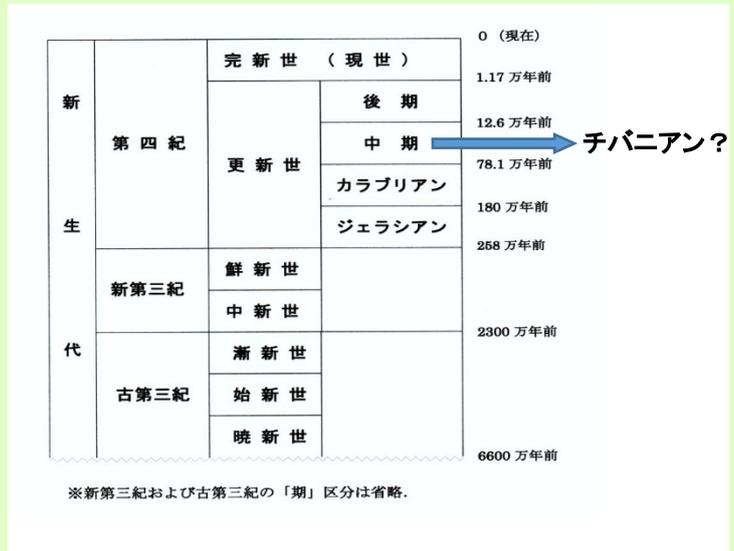
**「チバニアン」とは** 地球の誕生以来、現在まで約四六億年の地球の歴史を地質時代といい、地質時代は生物界とくに動物界の大きな変遷(出現や大量絶滅など)にもとづいて時代区分がされています。それらは地層とその地層中に含まれる古生物(化石)の研究から明らかにされてきました。地球上に硬い骨格をもつ多細胞生物の出現したときを境界にして、それより前の時代をまとめて先カンブリア時代、それ以降は古生代、中生代、新生代と大きく時代区分しています。

たとえば、新生代とは、新しい生物の時代と

いう意味合いであり、それまでの大型ハ虫類(いわゆる恐竜)や海の中で大繁栄したアンモナイト類が大量絶滅し、ホ乳類が大繁栄する時代です。各時代をさらに詳しくみると、ある古生物群の小規模な絶滅があり、そのことによって、より細かく区分されます。その時代区分の単位として、大きい方から小さい方へ、「代(だい)」→「紀(き)」→「世(せ)」に区分されます。ここまでは高校の地学の授業でも習いますが、「世」はさらに「期(き)」に区分されています。

新生代は新しい方から第四紀、新第三紀、古第三紀に三分されます。最も新しい地質時代である第四紀は、地球が寒冷化しはじめてから現在までの時代であり、氷河の発達と人類の出現・進化発展に特徴づけられ、人類紀とも呼ばれています。この地質時代は、さらに完新世と更新世に二分されます。新しい完新世は現世ともいわれ、現代人の生活する時代です。古い方の更新世は、ジェラシアン期、カラブリアン期、「中期」、「後期」に四分されています。前の二つの地質時代名はともにイタリア半島の地域名ですが、後半の「中期」、「後期」の2つの時代は世界共通の時代区分の名称がまだ決定されていません。(新生代の時代区分参照)

このような時代区分のほかに、絶対年代(放射年代)と言って、今から何年前といった数字で表わす表わし方があります。この数値は、岩石



新生代の時代区分

中の鉱物や化石に含まれる放射性元素の量を測定することにより求められます。

さて、話題の「チバニアン」は、「期」に相当する時代区分であり、「新生代第四紀更新世中期」に対して提案された言葉です。ラテン語で「千葉の時代、千葉時代」を意味しています。そして、その絶対年代は、今から約七十七万年前から十二・六万年前の地質時代にあたります。

**国際標準模式地** ユネスコの機関である国際地質科学連合では、四年ごとに各国も回りて万国地質学会議を開き、時代区分やその境界

を検討し、地層区分の定義・名称や年代などをたえず見直ししています。

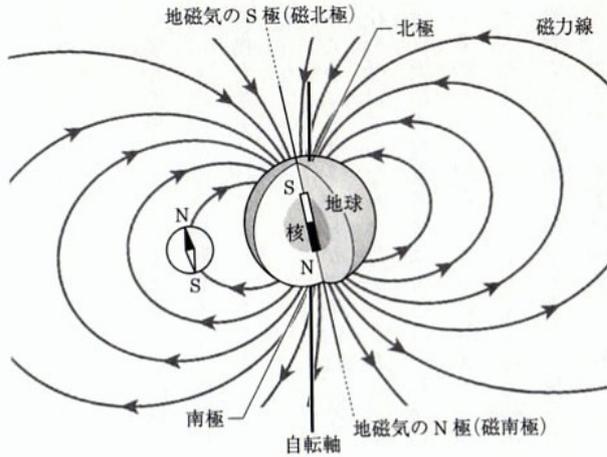
こうして、ある時代の地層境界をもっとも良く観察・研究できる地点を世界にただ一ヶ所だけ選定します。その場所が「国際標準模式地」です。そして、その場所のその特定の地層境界には認証の金杭(ゴールデン Spike)が打ち込まれます。

ところで、第四紀更新世カラブリアン期とまだ時代名が決定されていない「中期」との時代境界は、国際標準模式地が決まっていない一つです。この時代境界は、地磁気が最後の逆転を起こした時期である「ブリュンヌー松山境界」とすることが国際的に約束されています。

この国際標準模式地の候補の一つが、市原市田淵字白尾にある露頭(地層が露出する場所、崖)「千葉セクション」なのです。現在、このほか、イタリア南部のモンタルバーノ・イオニコおよびヴェアレ・デ・マンケの露頭が候補に上がっています。

**古地磁気と地磁気の逆転** 地球は巨大な磁石のような性質をもっています。これを簡単に考えるには、次ページの図のように、今現在、北極の近くに棒磁石のS極が、南極の近くにはN極があると考えるとわかりやすいと思います。

N極からS極に向かう磁力線に支配されて、私たちがもっている磁石(コンパス)の方位磁針のNが北極方向を示すことになるのです。



鎌田浩毅『地学のツボ』ちくまプリマー新書 筑摩書房(2009)より

永久磁石説による考え

しかし地球内部はその中心部で約六千度もの高温であり、磁性体が磁気を保てないことは明らかです。現在では、地球内部の外核はおもに熔融状態の鉄から出来ていて、熱による対流や地球の自転による力などをうけて複雑に流動して電流が生じ、そのためそれを取り巻くように磁場が発生して磁場が保たれると考えられています。

簡単にいえば、地球は巨大な発電機であり、その発生した電流によって地磁気が生じている(ダイナモ理論)という考えが広く受け入れられています。

ています。

磁気の逆転という現象は、一九二九年に京都帝国大学の松山基範教授によって発見されています。

磁鉄鉱やチタン鉄鉱などの磁性鉱物を含む火成岩類や堆積岩類には、生成当時の地磁気の向きや強さが記録されています。これを残留磁気といいます。マグマが冷えて固結するとき、その時代の地球磁場に支配され磁性鉱物が磁化されます。これが火成残留磁気です。また、磁性鉱物を含む砂や泥が堆積してできた堆積岩には堆積当時の地球磁場に支配され、磁性鉱物にはその向きが保持されています。この磁気を堆積残留磁気といいます。

地層や岩石のもつきわめて微弱な磁力からN極・S極の方向や強さを測定し、当時の地球磁場の北極、南極の位置を決定できます。

このようにして各時代の地層や岩石のN極とS極を測定してゆくと、磁極の位置や地磁気の強さはゆっくりと変動し、かつての地質時代のN極・S極が入れかわる地磁気の逆転がくり返し起きていたことが明らかにされています。

古地磁気の年代スケールでは、極性の区切りのよいところで時代境界を引いています。現在と同じ極性状態になっている時期を正磁極期、逆の状態の時期を逆磁極期といい、研究者の名にちなんで、現在〜七八万年前までの期間をブリ

ュヌ正磁極期、最も新しい逆転した時代である七八万年前〜約二六〇万年前を松山逆磁極期とよんでいます。この境界がブリュヌー松山境界です。

**千葉セクションの現状** 白尾の養老川右岸の崖が「千葉セクション」です。千葉セクションの地層全体は、ゆるく北に傾斜した泥岩層で、ちょうど露頭の中位のやや上方に層厚二〜三センチメートルの白色細粒火山灰(現在、白尾火山灰層、Bayerと命名されている)が挟まれています。

露頭では、もちろんブリュヌー松山境界は肉眼では見えません。今日の研究では、ブリュヌー松山境界は、その白尾火山灰層の上位約八



千葉セクションの全景写真 (2014年2月 撮影)

十センチメートルの層準とされています。測定した古地磁気の様子を肉眼でもわかるようにするため、いま、地層には、赤色、黄色、緑色の杭が打たれています。赤色の杭は逆磁極期、上方の緑色の杭は正磁極期、黄色の杭は、逆転したり戻ったりする不安定な時期を示しています。

地磁気の逆転は、突然に起こるものではなく、ときに逆戻りしながらも徐々に弱くなったりしながらゆっくりと変化するようです。

目印となるこの白尾火山灰(BYEED)の噴出年代は、その中に含まれる鉱物であるジルコンを使ったウラン-鉛法により、約七十七万二千年前と測定されています。またその起源は木曾御嶽山



整備された状態(露頭の左上、拡大写真)  
(2016年10月 撮影)

であることが明らかにされています。

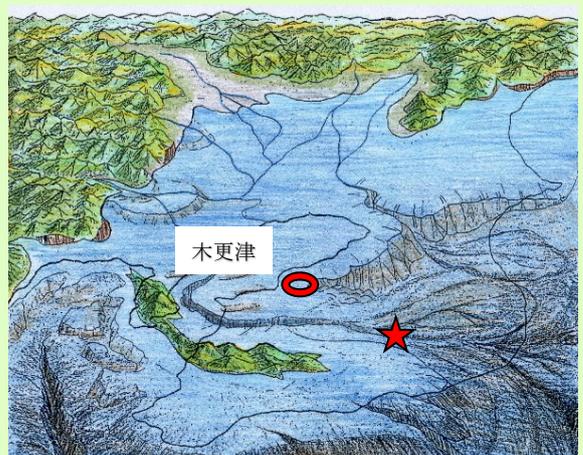
既述のように、更新世の前期と中期の境界は、地球の磁場の最後の逆転が起きた「ブリュンヌー松山境界」とすることが国際的に約束されています。そこで、研究グループはその時代境界をこの白尾火山層下底に置くことを提案しています。そうとなると、従来七八万年前とされていた年代が今までよりも約一万年近く若くなることとなります。

**木更津市域との関連性は？** ところで、千葉セクションを構成している地層・上総層群国本層が堆積した頃の木更津市域はどうだったのでしょうか。

上総・下総地域は同じ外洋の海底であったのですが、養老川付近は大陸斜面付近であったのに対し、市域はもっと浅い陸棚であったと考えられています。(下図参照)

市域にも当然同時代の地層が堆積するのですが、現在の地質構造からみて、およそ千メートル前後の地下深くになってしまいます。

また、いま現在、上総層群上部から下総層群下部・中部までが第四紀更新世中期とされていますから、もし「チバニアン」期が認定されたならば、市域の海岸や河川沿いの低地および台地表面部を除いたほとんどはチバニアン期の地層ということとなります。更新世中期の終わる年代が、現在、絶対年代で十二・六万年前とされています。



渡部ほか3名(1987)より引用・加筆

約60万年以前の「海底の時代」  
上総層群が堆積した頃の様子

すから、これに最も近い年代のテフラ層として十二・五万年前〜十三万年前(町田・新井、二〇〇三)とされる木下層の Koi (Taur-11) が存在します。このテフラは、市域では桜井をはじめ、数ヶ所で観察されます。

もし、千葉セクションが選定され、そして、地質時代の名称に「チバニアン」が決定されるならば、日本ではもちろん始めてのこととなります。このことは地質学のみならず、昨年の日本発見の原子番号一一三番の元素「ニホニウム」と並び称せられるような科学史上に残る画期的な事柄となります。

選定されるかどうか不明ですが、いずれにしても、地域の貴重な自然の財産の一つです。

今回、このニュースが流れたことだけでも地元には見学者が増え、地域の活性化にも大きく貢献しているということです。

※参考

『千葉県環境研究センター・ニュース』通巻十八号(一九九八)

鎌田浩毅『地学のツボ』ちくまプリマー新書 筑摩書房(二〇〇九)

下・中部更新統境界国際模式地国際シンポジウム実行委員会『人類の時代(第四紀)の時代区分を決める国際基準となる地層』(二〇一一)

下・中部更新統境界国際模式地国際シンポジウム実行委員会・古関東深海ジオパーク認証推進協議会「地質時代(地球史)の中に千葉時代を刻む要望書」(千葉県知事あて文書)(二〇一五)

お知らせ

平成二九年度木更津市史編さん事業公開講座を国立大学法人千葉大学との共催で開催します

題名 暮らしから見つける木更津の文化資源

講師 千葉大学国際教養学部准教授・木更津

市史編集部会長(民俗部会) 和田 健

(わだ けん)氏

千葉大学工学研究院教授 植田 憲(う

えだ あきら)氏

木更津市史編集部会委員(民俗部会)

パネル展示

田村 勇(たむら いさみ)氏

木更津の多様な文化資源の再発見・再認識について 千葉大学工学部デザイン

ンコース

ディスプレイ

暮らしの中の文化資源―「可視化」と「共有化」そして「活用」の意味―

日時 十二月十六日(土) 午後一時三十分受

付、午後二時開演

場所 中央公民館(中央一―一五―四)

※JR木更津駅西口から徒歩で七分(駐車場に限りがございますので、公共交通機関をご利用ください。)



八剣八幡神社の祭礼

定員 一五〇人(申込順)

申込方法 氏名・住所・電話番号を文化課窓

口・電話・ファックスまたはEメールで申し込み。(市ホームページ 市の

紹介/歴史・文化財/木更津市史編さん事業/公開講座のご案内もご覧ください。)

ださい。)

刊行物のご案内

木更津市史編さんに関する刊行物を文化課または郷土博物館のすぐで販売しております。

『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』(A四版 本文二七四ページ) 二〇〇〇円



平成二九年度の刊行予定

『木更津市史研究』創刊号(A四版)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』

平成二六―二八年度版(A四版)

**ボランティア募集しています**

木更津の歴史・文化・自然に興味があり、市史編さんにご協力いただけるボランティアを募集しています。

特に、旧木更津町（現在の中央公民館周辺）において、昔からの生活習俗や民俗文化を聞き取りする調査を行います。

ご協力いただけるかたは、ご連絡ください。（ボランティア登録には条件があります。）

**木更津市マスコットキャラクター**

**きさぽんの新しいデザインができました**

きさぽんは市制施行七十周年を記念して誕生した市のマスコットキャラクターです。「証城寺の狸囃子（しようじょうじ）のためきばやし」（野口雨情作詞、中山晋平作曲）で有名になった日本三狸伝説のひとつとされる證誠寺（しようじょうじ）の「狸囃子」にちなんで誕生しました。



きさぽんの新しいデザインは、前方後円墳である金鈴塚（きんねづか）古墳を市民

や市外の方にもっと知ってもらえるようつくりました。

金鈴塚古墳は古墳時代後期の六世紀末頃に造られた前方後円墳で、小櫃川流域にいたとされる「馬来田国造（うまぐたのくにのみやつこ）」一族の古墳と考えられています。古墳の大きさは全長九十メートル（推定）、遺体を安置した横穴式石室と墳丘の一部が残り、千葉県指定史跡に指定されています。



金鈴塚古墳（中央に見えるのは横穴式石室）

石室の中から純金製の鈴五個、装飾付大刀十九振のほか、武器・武具類、馬具、装身具、銅鏡、須恵器、土師器などが出土し、古墳から純

金製の鈴が出土しているのは金鈴塚古墳が唯一であり、さらに装飾付大刀の出土数も日本一です。これらの出土品は、国指定重要有形文化財「上総木更津金鈴塚古墳出土品」に指定され、郷土博物館金のすずで保管・展示しています。ぜひご来館ください。

**編集後記**

このたび、『木更津市史編さんだより』第二号を発行します。

今年、本市の市制施行七五周年にあたります。また、大政奉還百五十周年の年でもあることから、関連記事を掲載しました。このほか、近現代部会が調査した奉安殿や、世界的に注目されているチバニアン（国際標準模式地）について原稿をお寄せいただきました。また、これまで市史編さんにご協力いただきました金子馨前木更津市史編集委員会委員長から、今後の『木更津市史』編さんへの想いをお寄せいただきました。この場を借りてお礼申しあげます。

これからも、新たな『木更津市史』編さんの中でわかった木更津の歴史・文化・自然について紹介してまいります。（事務局）